

熊本大学工学部 正員 三池 亮 次
同 上 正員 〇小林 一 郎

1. はじめに. 筆者らはさきに, Lagrange-Euler 併用形で 割線増分形エネルギー基礎式を誘導した。すなわち, 物体の変形を, 変形前, 変形の中間状態, 及び変形の中間状態において, 表面力 P と物体力 f が作用し有限の変位増分 Δu が生じた増分後の状態に分けると, その有限の変位増分 Δu に対して次の仮想仕事の原理

$$\int P \cdot \Delta u \, dA + \int f \cdot \Delta u \, dV = \left(\int P^* \cdot \Delta u \, dA' + \int f^* \cdot \Delta u \, dV' \right) = \int \text{trace} (T_k \cdot \Delta E_k) \, dV' \quad (1)$$

が成立する。ここに dA, dV は, 中間状態における, dA', dV' は, 増分後における表面積及び体積の要素である。また $\Delta E_g \in \text{Green}$ ひずみテンソル増分とすると $\Delta E_k = \Delta E_g + \Delta E_\theta$ であり, ひずみが微小であるが回転 $\Delta \theta$ が有限であるような 2次元変形する物体に対して T_k は埋め込み座標系に対する通常の応力テンソル T^{**} に等しく, また ΔE_g は埋め込み座標系に対する通常のひずみテンソル E^{**} に等しい。また

$$\Delta E_\theta = \begin{bmatrix} 1 - \cos \Delta \theta & 0 \\ 0 & 1 - \cos \Delta \theta \end{bmatrix} \quad (2)$$

となるから

$$\begin{aligned} \text{trace} (T_k \cdot \Delta E_k) &= \text{trace} (T^{**} \cdot \Delta E^{**}) + \text{trace} (T^{**} \cdot \Delta E_\theta) \\ &= \tau_{11}^{**} \Delta e_{11}^{**} + \tau_{22}^{**} \Delta e_{22}^{**} + \tau_{12}^{**} \Delta e_{12}^{**} + \tau_{11}^{**} (1 - \cos \Delta \theta) + \tau_{22}^{**} (1 - \cos \Delta \theta) \end{aligned} \quad (3)$$

ここに, $\tau_{ij}^{**}, e_{ij}^{**}$ は T^{**} および E^{**} の要素である。軸力 N , せん断力 Q , 曲げモーメント M を受ける 2次元骨組構造では, 部材断面の中立軸からの距離 x において

$$\left. \begin{aligned} \tau_{11}^{**} &= \frac{N}{A} + \frac{M}{I} x, & \tau_{12}^{**} &= \frac{Q}{A}, & \tau_{22}^{**} &= 0 \\ \Delta e_{11}^{**} &= \frac{\Delta N}{EA} + \frac{\Delta M}{EI} x, & \Delta e_{12}^{**} &= \frac{\Delta Q}{GA}, & \Delta e_{22}^{**} &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (4)$$

であるから, 骨組部材軸に沿う長さ ds , 部材断面の距離 x における面素の面積 da とする。 $dV' = da \, ds$ であり

$$\left. \begin{aligned} \int \tau_{11}^{**} \Delta e_{11}^{**} \, da \, ds &= \int \left(\frac{N}{EA} \Delta N \, ds + \frac{M}{EI} \Delta M \, ds \right), & \int \tau_{12}^{**} \Delta e_{12}^{**} \, da \, ds &= \int \frac{Q}{GA} \Delta Q \, ds \\ \int \tau_{11}^{**} (1 - \cos \Delta \theta) \, da \, ds &= \int (1 - \cos \Delta \theta) N \, ds \end{aligned} \right\} \quad (5)$$

これより, T_k が ΔE_k に対してなす仮想仕事の総和は

$$\int \text{trace} (T_k \cdot \Delta E_k) \, dV' = \int \left[\left\{ \frac{\Delta N}{EA} + (1 - \cos \Delta \theta) \right\} N + \frac{\Delta M}{EI} M + \frac{\Delta Q}{GA} Q \right] \, ds \quad (6)$$

である。上式において

$$\begin{bmatrix} \Delta e_N \\ \Delta e_M \\ \Delta e_Q \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \frac{1}{EA} & 0 \\ 0 & \frac{1}{EI} \\ 0 & \frac{1}{GA} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \Delta N \\ \Delta M \\ \Delta Q \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 1 - \cos \Delta \theta \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \quad (7)$$

とし, さつこれ E 次式のようにマトリックス表示する。

$$\Delta e_m = F_s \Delta p_m + \Delta e_\theta = \Delta e'_m + \Delta e_\theta \quad (8)$$

2. 接続マトリックスによる定式化. 上述の理論を接続マトリックスによる平衡法によって骨組構造に適用する。部材断面力 P_m 、変形(相対変位) e_m 、有限の変位増分 Δd とする式(1)は

$$P^t \Delta d = P_m^t \cdot e_m \quad (9)$$

となる。ここで、接続マトリックス C 、剛性マトリックス K_m 、式(8)より $e_m = e_m' + e_0$ とすると、

$$\text{平衡条件: } P = C P_m \quad (10), \quad \text{弾性条件: } P_m = K_m e_m \quad (11), \quad \text{適合条件: } e_m = C^t \Delta d \quad (12)$$

であるので、変位増分 Δd は式(9)~(12)より、次式のようになる。

$$\begin{aligned} \Delta d &= (C K_m C^t)^{-1} P + (C K_m C^t)^{-1} C K_m e_0 \\ &= G^{-1} P + G^{-1} C K_m e_0 \end{aligned} \quad (13)$$

($\because G^{-1} = (C K_m C^t)^{-1}$)

なお、上式の右辺第2項が回転によるみかけのひずみ増分である。次にこれを、荷重増分法に適用できるように増分形で定式化すると、次の通りである。ただし ΔP を増分荷重、 ΔP_m を ΔP による部材断面力の増分とする。式(9)の仮想仕事の原理は次式に通りである。

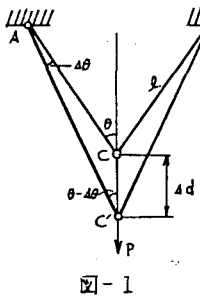
$$(P + \Delta P)^t \Delta d = (P_m + \Delta P_m)^t \Delta e_m \quad (14)$$

ΔP による、接続マトリックスの変化量を ΔC とすると、平衡条件と変位増分 Δd は次のようになる。

$$(P + \Delta P) = (C + \Delta C)(P_m + \Delta P_m) \quad (15)$$

$$\Delta d = (C + \Delta C) K_m (C + \Delta C)^t \{ \Delta P - \Delta C P_m + (C + \Delta C) K_m \Delta e_0 \} \quad (16)$$

3. 2本吊トラスによる例題. 図-1より幾何学的に求めた変位と式(13)が等しいことを確かめる。図より



平衡条件: $P = 2N \cos(\theta - \Delta\theta)$, 適合条件: $\Delta l = \Delta d \cos(\theta - \Delta\theta)$ となるので、微小変形の変位 $\Delta d'$ は図-2において $\Delta x = \Delta l$ として次式になる。ただし、バネ剛性 k は定数とし、弾性条件として $\Delta l = P / (2k \cdot \cos(\theta - \Delta\theta))$ を用いる。

$$\Delta d' = \frac{P}{2k} \cdot \frac{1}{\cos^2(\theta - \Delta\theta)} \quad (17)$$

有限変位の場合は $\Delta x \neq \Delta l$ より $\Delta l = \Delta d \cos(\theta - \Delta\theta) - (1 - \cos\theta)l$ を用いて

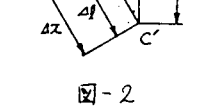
$$\Delta d = \frac{\Delta l}{\cos(\theta - \Delta\theta)} + \frac{(1 - \cos\theta)l}{\cos(\theta - \Delta\theta)} = \frac{P}{2k} \cdot \frac{1}{\cos(\theta - \Delta\theta)} + \frac{(1 - \cos\theta)l}{\cos(\theta - \Delta\theta)} \quad (18)$$

となる。ここで式(13)より同じ Δd を求める。 $P = P$, $C = [-\cos(\theta - \Delta\theta), -\cos(\theta - \Delta\theta)]$ より

$$G^{-1} = \frac{1}{G} = (C \cdot \begin{bmatrix} \frac{1}{k} & 0 \\ 0 & \frac{1}{k} \end{bmatrix} \cdot C^t)^{-1} = \frac{1}{2k \cos^2(\theta - \Delta\theta)} \quad (19)$$

$$C K_m e_0 = C K_m \cdot \begin{bmatrix} (1 - \cos\theta)l \\ (1 - \cos\theta)l \end{bmatrix} = 2k \cos(\theta - \Delta\theta) \cdot (1 - \cos\theta)l \quad (20)$$

となり、式(19)(20)を式(13)に代入すれば、幾何学的に求めた式(18)と全く同一の式が得られ、みかけのひずみ増分 $(1 - \cos\theta)l$ を考慮する必要があることが確かめられることになる。尚、数値計算等は当日に報告する予定である。



参考文献 (1) 三池亮次 "有限変形における増分形仮想仕事の原理" 第34回年次学術講演会 昭和54年10月

(2) 三池亮次 "有限変形における補足仮想仕事の原理とその応用" 第29回応用力学連合講演会 昭和54年11月